

Title	職務特性と帰属意識
Sub Title	
Author	廣田孝一(Hirota, Takaichi) 高木晴夫
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1989
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1989年度経営学 第714号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0714">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0714</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 廣 田 孝 一 主査 高 木 晴 夫  
(ファイザー製薬株式会社) 副査 石 田 英 夫  
所属ゼミナール 高 木 晴 夫 研 和 田 充 夫

## 職務特性と帰属意識

本論文はキャリアの自由度の低い営業部門における大学卒従業員の帰属意識を研究するものである。従来、高いと言われていた大卒男子従業員の帰属意識であるが、上記の条件ではどうなるかが問題意識であった。

組織に対する個人の帰属意識は、組織と個人との相互影響過程として生まれてくるものであり、帰属意識は個人と組織との心理的な結合のあり方を意味するものと定義する。したがって帰属意識を研究することは自社人材の事前把握につながり、経営戦略実行のために重要なことと思われる。経営戦略を実行するためには人間が実際に動く必要があるからである。

実際の調査研究は、研究開発型製薬企業であるP社の営業部門従業員と営業部門を経験してスタッフ職についている従業員を対象に行った。

分析では1. 帰属意識分析、2. 職務特性分析、3. 帰属意識に影響を与える要因の探索を行った。

分析の結果でわかったことは1. 帰属意識には3因子あること、2. 帰属意識の実際の高低のレベル、3. 帰属意識には昇進願望でなく「昇進の結果」が影響を及ぼしていること、4. 帰属意識がもっとも高まるときの構造、5. 仕事の有意義感の違い、6. キャリアニーズの重要性、7. 報酬の効果、8. コミュニケーションの重要性である。

分析の結果から帰属意識を高めるために提言することは以下の通りである。

1. 営業現場重視の社風を構築する
2. プロパーのイメージの改善
3. 教育訓練・能力開発などの運用のあり方
4. インセンティブプラン改善